

☞昨年末より事務局のメールが変更しています。npo\_inch@yahoo.co.jp に変更しました。よろしくお願ひします。☞

☞ホームページも <http://www.npo-inch.ppmusee.org/index.html> に変更しています。☞

NPO 法人 自然文化誌研究会 会報

ナマステ 152号

2024年1月20日

# ナマステ



特定非営利活動法人

自然文化誌研究会 会報誌

## 152号

2024年1月20日発行号



「民宿の屋上からの日の出」@タイ パンダキャンプの近く

自然文化誌研究会副代表理事 中込貴芳（なかごみきよし）

新年明けましておめでとうおめでとうございます。

一日の能登半島地震、二日の航空機事故と2024年は何か不穏なものを感じさせる出来事で幕開けとなりました。新型コロナウイルスに翻弄された時期も終わりようやく明るい日常が戻りつつあった矢先に、波乱含みの一年にならなければ良いと思ってしまいます。また、自らの活動の近いところでは、追い風になっていたアウトドアブームにも翳りが見えるという情報もあります。しかし、自然から学びの自然の中で遊び、主体的に自らを研ぎ澄ますことを目指した私たちの活動は、そうした危機の中ですます真価を発揮していくものです。状況に流されず、一步一步着実に私たちの活動を継続していきましょう。

## タイ・ベトナム環境学習キャンプ2023 報告 中込貴芳（なかごみきよし）

＜今回のキャンプの旅程 2023年8月14日～24日＞

14日 成田出発 ハノイ経由でバンコクへ グランドビューホテル泊

15日 バンライへ パンダキャンプ近くの民宿泊

16日 ワークショップ（発酵の実験、パネルシアター、日本のエッセンシャルオイルについて） 民宿泊

17日 Tham Than Pod National Park（鍾乳洞観察） コテージ泊

18日 国立公園よりバンライへ タイマッサージ 民宿泊

19日 バンライからバンコクへ グランドビューホテル泊

20日 バンコクからハノイ Bendecir Hotel & Spa 泊

21日 LOD（派遣会社の日本語学校）訪問 Bendecir Hotel & Spa 泊

22日 ハロン湾観光ツアー Bendecir Hotel & Spa 泊

23日 ホーチミン廟、ホーチミン博物館、水上人形劇 深夜成田へ

24日 朝成田着



＜横山緑さんによるパネルシアター＞

新型コロナウイルスの流行により2020年以降中断していたタイキャンプを流行も落ち着いてきたので再開した。このキャンプは、バンコクの北西に車で4時間ほど行ったバンライという地方都市で、シリポン氏が始めた環境学習施設であるパンダキャンプと自然文化誌研究会（INCH）が20年余りに渡って交流し開催してきたキ

佐々木正久さんがYouTubeを開設しました。「まー君のナチュラルライフ」です。最新では小菅村での炭焼きの動画もアップされています。ぜひご覧ください！！

キャンプだ。このキャンプはシリボン氏と初めて知り合った頃は、パンダキャンプもまだできたばかりでその広場にテントを張って夜通し語り合ったことから始まった。それ以来、毎年訪問する様になり、子供達や地域の人たちと一緒にワークショップ行い、カレン族やラオ族などの少数民族の村を訪問してその生活や知恵を学び、近くの国立公園で野生生物を観察したりその保護について学んだりするというスタイルでキャンプを続けてきた。

今回のキャンプの参加者は自分も含め計5名、全員これまでこのキャンプに参加したことのある中高年、それに若林、エーさん夫妻と息子のキーリーを加えて8名だ。ベトナムの日本語学校に勤めている友人も訪ねたいと考えていたので、タイに6泊、ベトナムに3泊で8月14日朝出発、24日朝帰りの予定で計画を立てた。航空券はなるべく安く上げるために、航空会社はベトナムのLCCのベドジェットを使った。成田ーハノイ往復航空券とハノイーバンコク往復航空券を組み合わせて使うことを計画し、行き帰りハノイ経由でタイまで行くことにしました。これだと一人あたり8万4000円余り、完全前払いのキャンセル不可の航空券だ。

さてキャンプは、14日朝成田に集合してチェックインするところからトラブルが発生。ハノイのノイバイ空港で乗り継ぎに3時間あまり時間をとって乗り換えれる計画だったが、LCCだとトランジットの手続きをしてくれないらしい。そうなると一度、出国して入り直さなければならない。それで3時間は余りに不安だ。カウンターで困った様子をしてメンバーで話し合っていると、その様子を見て、受付の人が上司に掛け合ってくれて、特別にトランジットの手続きをしてくれてことなきを得た。

ベドジェットは流石にLCC。その狭いこと狭いこと。キャビンアテンダントの中には屈強な男性もいる。この理由はハノイからバンコク行きに乗り換えた時に明らかになる。荷物収納スペースに乗客の多量の荷物を無理矢理にでも詰め込まなくてはならないため、腕力が必要だったのだ。なんとか狭い座席に耐えながら夕方、タイのスワンナプーム空港に到着した。

空港で予め連絡を取っていたチナタッタ先生と久しぶりの再会を果たし、ホテルへ向かう。バンコクのホテルはいつも利用してるラジャバトプラナコン大学内にあるグランドビューホテルだ。

4年ぶりのバンコクは以前と随分違って、今回のホテルへの移動はスカイトレインなどの電車を使いながら行くことができたし、ホテルも内装が一一新されているしカードキーになっている。今回は、大学の近くの葬儀場からホテルまで歩いたが、来年はモノレールでもっと近くまでいけるらしい。

着いた晩は、お決まりのタワンデー ジャーマン ブリュワリーという大きなステージのあるホールに行き、チナタッタ先生と再会を祝う。やはり、バンコクに着いた晩はここで3リットルのタワービールで祝杯を上げてショーを見ないとこのキャンプは始まらない。明日は、バンコクを離れバンライのパンダキャンプに出発する。

15日、ホテルをバンライから迎えにきたワゴンに乗り、途中ロータス（タイの大きなスーパー）に立寄って午後にパンダキャンプに到着した。シリボン氏と再会を喜び合い久しぶりのパンダキャンプを見て回った。パンダキャンプは、植えられた木々がますます繁茂し最早ジャングルようになっており、かつて泊まっていた竹でできたバンガローは朽ちかかっている。キャンプの中には新しい研究棟が建っていてシリボン氏はそこで植物から抽出したエッセンシャルオイルの研究をしている。以前行っていた針なしバチの養蜂はあまりうまく行っていないようだ。一通りキャンプを巡った後、バンガローには泊まれないので車で近くの民宿に行って荷物を下ろし、キャンプに戻って夕食を食べながら明日のワークショップの打ち合わせをする。久しぶりのパンダキャンプの夕食は格別で、どこのタイ料理屋の料理より日本人の口に合い美味しい。しかも、同じ料理は2度は出ない。

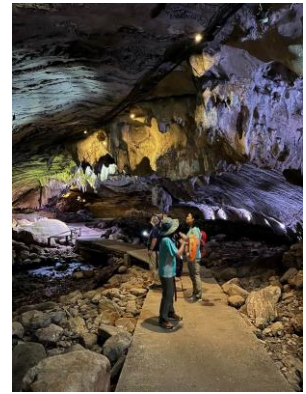
16日はワークショップ当日。朝、近くの小学校の子供達が30人余り、先生に引率されてやって来る。最初は、メンバーの永井さんの発酵の実験だ。酵母菌の入った小さなカラフルな粒を作り砂糖水の入ったペットボトルの中に落として、発酵によってできる気泡により浮き沈みする様子を観察する。その次は、横山さんがパネルシアターで笠地蔵と漢字の成り立ちについて上演する。パネルシアターは、フェルト地に絵を貼り付けて物語る動く紙芝居のようなシアターだ。タイの子供達は、素直で一生意気に取り組みパネルシアターを歓声を上げて楽しんだ。午前のワークショップはここまでで午後からはシリボン氏が、木の葉を集めさせて蒸留法によるエッセンシャルオイルの抽出の実験を行う。その時に私は、日本の香りやエッセンシャルオイルの利用について話をし、実際に杉やヒノキなどから抽出したオイルやお香の匂いを嗅がせたりした。ワークショップの後は、いつものビールで成功を祝って祝杯を上げる。一仕事終わった後のビールの味は区別だ。そしてビールはこのキャンプの必需品。



＜ワークショップの記念撮影＞



＜発行の実験＞



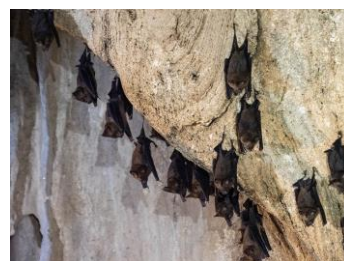
＜国立公園の鍾乳洞＞

翌日（17日）、いつも行くファイ カ ケン野生生物保護区は、レンジャーの研修会があるということで行くことができず、Tham Than Pod National Park という初めての場所に行くことになった。実はこの遠征には、シリポン氏ではなくシリポン氏の息子であるデーが同行する予定だったのだが、16日の夜にシリポン氏の自宅の玄関先で奥さんのポタンさんがグリーンスネークという毒蛇に噛まれて入院するという事故が起こったのだ。デーはその看病のためにバンライに残り看病することになって、急遽シリポン氏が私たちと同行することになったのだ。さて、この公園はバンライからは二三時間で行ける距離の小さな国立公園で、谷を流れる川の先が大きな鍾乳洞が長いトンネルになっておりそこを抜けて谷の上にある寺までトレイルが続いているらしい。着いた時には、公園に蝶が沢山舞っていた。鍾乳洞のトンネルには、珍しいカエルが生息しているらしいが見ることはできなかったが、何種類かの沢山のコウモリが生息していた。鍾乳洞のトンネルを抜けてしばらく行った先は、そのトレイルが荒れていて通行できないようで、我々は車で一旦公園の外に出てずいぶん遠回りした後、トレイルの終点の寺まで向かった。そこから少し降って、この公園のメインの奇観である巨大な石灰岩アーチを観に行った。ここは、カレン族に取ってかつてはとても神聖な場所だったらしく壁面には魚のような鱗模様が描かれている場所があったり、アーチの下にはたくさんの仏像が祀ってあった。確かに巨大なアーチの壮観な眺めといい聖地と呼ぶにふさわしい場所だ。実際にカレン族の夫婦が訪れて祈りを捧げていた。その日は、国立公園内のコテージに戻り宿泊した。

18日は、もう一度鍾乳洞を見学した後、パンダキャンプに戻りタイマッサージを堪能した。タイではマッサージは医療行為の一環で、バンライでは病院でとても気持ちの良いハーブマッサージが安価な料金で受けられる。しかし今回は、全員分の予約が取れず私だけシリポン氏と一緒に民間のマッサージを久しぶりに受けることになった。そしてその帰りに病院で入院しているポタンさんを見舞った。タイでは、毒蛇に噛まれた時には噛んだ蛇を殺して医者に見せるのだそうだ。そうすれば早く毒が特定でき迅速に治療が行える。奥さんのポタンさんの片方の足は大きく腫れていたが、聞いてみるとそれでも小さくなったようで、だいぶ良くなったそうだ。大事がなくて本当に良かった。



＜巨大な石灰岩のアーチ＞



＜鍾乳洞のコウモリ＞

19日は、バンライの市場に行き朝食を取った後で、バンコクに戻り、夜は再びビアホールへ。翌日は、タイではいつもお世話になっているシリワット先生の奥さんであるチンタナさんが朝ホテルに会いに来てくれて、シリワットさんから預かったお土産をいただいて一緒に食事した。そのお土産は、シリワット先生が現在住んでいるロップリーという街の伝統工芸品の土瓶と小杯のセットでかなり嵩張るものだった。タイの人はとても親切で義理堅くいつも沢山お土産をくれる。それはそれで嬉しいが、運ぶ手間とかもう少し考えてくれたらいいのにと思ったりもする。まあ、それは贅沢な悩みというものかもしれないが。その午後、自力で電車に乗って空港まで行きハノイに向かって出発した。

（後半につづく）

## 『冒険学校まふゆのキャンプ2023』報告

冒険学校まふゆのキャンプ（初）村長 熊木日向（くまきひなた＝くまちゃん・自然文化誌研究会）

さあ、参加者が来るぞ！初めて村長を務める身としてドキドキしながら出迎えることになりました。キャンプの参加者は7人で、多くがINCHのキャンプ経験者でした。しかし、まふゆのキャンプは初めての子が多く、キャンプ場についた時には、思ったよりも寒かったのか、ジャンパーを着込んでいる子を見つけました。経験者が多いこともあって到着してほどなく焚き火で暖をとってみたい、探索をしてみたいと各々でまふゆのキャンプの様子を伺っているようでした。とても活動的な参加者たちをみて少し緊張が解れました。参加者同士で交流があったらなと思っていますと、初めて参加する子にベテランの参加者が「どうも！」と言、ここで私は大丈夫そうだと思い、また一つ緊張がほぐれました。キャンプをしていくうちにどんどん活動的になる参加者たち。その参加者たちと一緒に楽しみながらもしっかり見てくれているスタッフたち。そんな様子を見て、またまた緊張が解れていきます。それでもずっと頭の片隅に「村長として振る舞えているか」という不安が残っていました。そんな不安も2日目になると、くまちゃんと呼んでいた参加者たちが村長と呼んでくれたことで、スーッと消えていきました。参加者のみんなありがとう！

さて、今回のキャンプから変わったことと言えば、コロナ対策でやめていたログハウスでの就寝をOKにしたことです。参加者たちは自分の寝たい場所で寝る。コロナ前そのものです！私が参加者の時は、ログハウスはA棟しかなく、ぎゅうぎゅうで寝ていましたが、その雰囲気に戻ってきたのを感じてとても嬉しかったです。そんなコロナ以前の雰囲気からキャンプ復活！と感じました。

このINCHのキャンプにスタッフとして参加してからは5年が経ちます。その5年の中で今回のキャンプは、一番参加者に近いキャンプでした。村長として、スタッフとして参加するキャンプでしたが、私自身が参加者になった感覚がありました。この感覚は、参加者を安心してスタッフに任せられると感じたからこそ出てくるものだと思います。コロナ禍のキャンプ運営は、障害が多く、大変な部分も多々ありました。コロナ禍を一緒に乗り越えてきたスタッフだからこそ感じる安心感かもしれません。スタッフのみんなありがとう！

改めて、とてもいいキャンプでした。私自身、経験したことのない村長という役に少し緊張していました。そんななか無事にキャンプを終えられたのは、参加者や事務局をはじめとするスタッフ、みんなのお陰です。本当にありがとうございました。私ごとですが、大学を卒業し、来年度から就職が決まりました。そのことから10年以上参加してきたこのキャンプが遠のくかもしれません。そんななか村長という役を任せてくれて本当にありがとうございました。とてもいい経験になりました。これからもどんな形でもINCHに関わっていきたいなと思っています。社会人、頑張ります！これからもよろしくお願ひします！





西村俊 自然文化誌研究会理事

明けましておめでとうございます。昨年は国際雑穀年（International Year of Millets）の中で、雑穀街道のFAO世界農業遺産登録に関する説明会（9/22）や、東京学芸大学創基150周年を記念した雑穀発泡酒／ソビボ・ピーボ（素美暮発泡酒）の復刻醸造（300本×2回：9/20と12/22）を行いました。残念ながら、本年2月のFAO世界農業遺産登録に向けた農林水産省への登録申請には至りませんでした。皆様のご尽力に感謝いたします。

現在、植物と人々の博物館の収蔵品の措置や出版物・ホームページなど今後の活動に関する見直しを進めています。メルマガ（不定期配信、おおよそ1月に1度程度）のメーリングリストを新しく再編しました。雑穀の種子の配布および栽培・加工方法の説明・現地実習も引き続き行っていきます。興味・関心がありましたら是非ご連絡ください。本年3月末には民族植物学ノート第17号の発行を予定しています。自由にお書き頂き、広く皆様からのご寄稿をお待ちしております。これまでの掲載記事については、植物と人々の博物館Web（<http://www.ppmusee.org/index.html>）からすべて読むことができます。博物館の今後に関してはご心配の声も頂いておりますが、協議事項については随時メルマガ・ホームページ等でご報告させていただきます。本年も皆様からのご支援・ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。



左上：雑穀街道のFAO世界農業遺産登録に関する説明会（9/22）の様子、  
右上：東京学芸大学創基150周年を記念した雑穀発泡酒／ソビボ・ピーボ（素美暮発泡酒）、  
下：博物館に収蔵しているサク葉標本：海外調査収集・実験証拠標本

## 宮本茶園 宮本透

2023年の夏は猛暑厳しく、体調を崩す人が多かったようです。私もお盆過ぎに4年ぶりの痛風発作が出て寝込みました。上野原市立病院で治療を受けて発作が治まった後、除草・施肥・耕起と傾斜地での野良仕事を続けていると今度は足首が痛み出し再び歩けなくなりました。整形外科の先生はレントゲン写真を示し「靭帯が伸びていますね。痛みを治すには仕事をしないでとにかく休む事です」と言われ、薬を処方してくれませんが、誕生日を迎えれば66歳、健康寿命を見極めながら野良仕事せざるを得ないようです。

9月下旬にはショックな出来事がありました。ご近所の先輩農家が急病で倒れ、救急搬送されたのです。真夏の午後に私が野良仕事をしていると「暑い日中にそんなに働くものではない。お茶を飲みに寄りなさい」と気遣いくださる方で、倒れた日は夕方まで夏野菜の片付けをしていました。私は17時過ぎに野良仕事を終え帰宅したのですが、その直後に倒れたそうです。幸いご家族が早く気づき大事に至らなかったのが幸いでしたが、軽トラの中から見えた忙しそうに野良仕事している姿が頭に焼き付いて他人事に思えませんでした。

### ・秋の茶仕事

藤野茶業部が登録されたさがみはらSDGsパートナー、相模原市役所より「さがみはらSDGsアワード2023」募集案内をいただきました。これまで藤野茶業部の取り組みはナマステ連載の藤農便りと娘のInstagramでしか発信していなかったため、相模原市役所でどのように評価されるか挑戦してみました。エントリーシートをダウンロードして7年間の活動を簡潔に書き記し、佐野川茶製品が紹介された新聞記事や季刊アゴラ投稿文を資料添付して応募しました。茶製品開発・荒廃茶園再生・茶園管理作業協同化・里山景観保全活動等、私たちの中山間地域農業振興の取り組みは残念ながらSDGsアワードを受賞する事は出来ませんでした。考えてみれば表彰される必要もない里山に暮らす農家の日常生活、これまでの歩みを振り返るよい機会になりました。

9月半ばからは秋の茶仕事です。秋肥を背負い式肥料散布器で施肥しますが、作業に時間がかかるようになりました。特に急斜面の和田茶園は、20kgの肥料を散布するのに1時間以上費やしています。数年後には肥料袋を担ぐ事が出来なくなるのでしょうか？以前に背負い式肥料散布器を紹介してくれた先輩農家が「宮本さんは一度に20kg入れるなんて元気だな、80歳過ぎると袋半分10kgの肥料を背負うのが精一杯だよ」とつぶやかれた事を覚えています、ようやくその言葉の意味がわかってきました。

10月になると県農業技術センターの秋整枝講習会が開催され、第56回神奈川県茶園共進会出品茶園には大洞茶園が選ばれました。大洞茶園の秋整枝作業は木村先生が指導してくださいました。2018年から耕作放棄茶園を藤野茶業部活動で再生させた大洞茶園、作業後に「見違えるような良い茶園になりましたね、宮本さんは7年間本当に頑張りましたよ。これからは無理せず楽しんで茶園管理をしてください」と労いの言葉をいただきました。

ちーむゴエモンからは稲ワラ・大豆殻をいただき、時間を作っては千木良から上岩へ搬送して茶園畝間に敷き込みました。田畑に積み上げられたワラ束や大豆殻が少しずつ減って、全て運び終えた時の達成感はとても嬉しいものです。千木良の大豆と佐野川の茶、津久井の特産物生産に農家の協働作業が出来ようになれば中山間地域農業の未来が開けるかもしれません。上岩の茅場ではススキを刈り込んで茶園に運び敷き込んでいますが、茶草場農法で栽培する茶葉の品質は確実に向上しているようです。年末に農協から届いた足柄茶精算明細書に記載された上岩茶園の茶葉評価は全て6等級でした。

2024年1月から新たに大洞茶園の貸借権を設定、宮本茶園は7反の茶園を耕作します。産業としての茶栽培を志すX君と出会える事を心の支えに、引き続き佐野川茶の相模原ブランド構築に精進します。



## ・国際雑穀年・東京学芸大学創基150周年記念雑穀発泡酒ピーボ復刻

残暑厳しい9月2日、Jazz Brewing Fujino においてピーボ第1回目の仕込みを見学させていただきました。農業高校教員だった頃に社会見学でキリンビールやアサヒビールの工場を訪れる機会がありましたが、大手メーカーの大量生産とは対極の手作りビール工房に入るのは初めての体験です。昨年収穫したキビを焙煎し、モルトを粉碎して、ホップと一緒に長時間蒸煮する工程はサウナに入っているようで全身汗だくになりました。ホップで苦味を付ける前の麦汁を試飲させていただきましたが、子どもたちが小さい頃に飲んでいた麦芽飲料ミロを思い出す甘さで驚きました。原料をろ過して人肌に冷ました麦汁には酵母が添加され、発酵槽に移されます。約1か月後アルコール発酵した麦汁は瓶詰めされ、さらに10日程二次発酵させてピーボに仕上がります。

諸事情から3回を予定していたピーボ仕込みは2回で終わる事になりました。街道美味にはなりませんでしたが、ご購入くださった皆様にはクリスマス・正月に楽しんでいただけるようINCHスタッフ総動員で発送作業を行いました。お飲みになった感想、お聞かせください。



## ・雑穀街道普及会の活動(最終回)

8~9月開催の第15回・第16回・第17回自給農耕ゼミ(佐野川)では防雀ネット掛け・キビ収穫・脱穀を行いました。これまでの脱穀はちーむゴエモンにおいてお願いしてヤギ苑の機械を使わせていただいていたのですが、今年は脱穀機が故障し人力で作業しました。ゼミ参加者は足で穂を力強く踏んで脱粒し、殻やしいなを箕で風選する作業を根気よく続け、ピーボ原料を無事調達する事が出来ました。

9月22日上野原市もみじホールで「雑穀街道を世界農業遺産に登録申請する説明会」が開催され、平日にもかかわらず会場には各地から多くの市民・自治体関係者が集まりました。木俣師が世界農業遺産登録の意義や取り組み経緯を報告し、雑穀街道各地域の活動が紹介されました。私は佐野川での雑穀栽培講習会やピーボ復刻の取り組み等を報告しましたが、久しぶりに人前で話したのでとても緊張しました。雑穀街道に関心を持つ人がたくさん集まった催しでしたが、残念ながら世界農業遺産登録申請については行政・地域社会の賛同を得る事が出来ず、雑穀街道普及会は解散する事になりました。支援して下さった皆様、長い間ありがとうございました。

10月22日第18回自給農耕ゼミ(佐野川)では上岩雑穀畑の片付け作業後に、ピーボお披露目会を開きました。参加者が持ち寄ったおつまみを肴にして2年間の雑穀栽培を振り返りながらピーボ試飲、皆さんの笑顔をいただき長年の苦勞が報われました。会の最後に記念撮影して解散、雑穀栽培講習会を無事終える事が出来ました。

雑穀街道普及会が解散し雑穀栽培講習会は終了しましたが、2024年以降も上岩で雑穀栽培を続けます。私も年を取りこれまでのような栽培講習会はできませんが、のんびり上岩雑穀畑で野良仕事しています。佐野川をお訪ねくださり、雑穀見本園管理を担っていただければとても嬉しいです。



※佐野川での雑穀栽培に興味のある方は宮本透(みやもととおる)

携帯: 090-2205-8476 e-mail: kwangjuu1980@yahoo.co.jp へご連絡ください。

## 3度目のアイラ島へ（その3）佐伯 順弘（岐阜県）

Travel planning 2017

DAY5 19<sup>th</sup> AUG ILY★今回の記録DAY6 20<sup>th</sup> AUG ILY

## DAY5 (19AUG2017) ILY

0600 起床。スコットランドらしい曇り空。天候の確認をしたり、窓を開けて真冬のように冷たい空気を深呼吸したりして、このアイラ島を楽しみつつ、身支度を整える。と同時に今日の行動予定について、もう一度検討する。

DAY3ではアイラ島に到着して、最初に向かったのが、バスが通っていない上に遠いキルホーマン蒸留所 (Kilchoman)。同じ方面にあるブルイックラディ蒸留所 (Bruichladdich) をパスして攻略。翌日 DAY4 には、交通の便が悪いブナハーブン蒸留所 (Bunnahabhain) に達した。このような攻略作戦を立てたのはアイラ島にある蒸留所の分散状況に原因がある。大きく分けて4方面に分散して配置されていることが最大の原因である。滞在するホテルがあるボウモアの街から西の方面にブルイックラディ蒸留所があり、そこに到達する途中から枝分かれするように作られている道の終点がキルホーマン蒸留所である。キルホーマンまではバスが通っていないため、半日にこの1つしか予定を組めなかったのである。そして、DAY4には、ボウモアの街から北東方面のやや遠方に存在するブナハーブン、カリラを攻略目標に決めた。バス停も近くにないにも関わらず、DAY3でのタクシー使用による多大な出費に懲りて、昔から街道を歩き通して鍛えた足を使うことにした。その結果、カリラ蒸留所 (Caol Ila) をパスしてブナハーブンのみを攻略することになった。途中、アードナホー蒸留所の建設現場を遠目に見物するという偶然にも出会うことができ、それはそれで素晴らしい作戦となった。

本日、DAY5はボウモアから南東方面に3つ集まっているアードベック (Ardbeg)、ラガブーリン (Lagavulin)、ラフロイグ (Laphroaig) の各蒸留所の攻略作戦を実施することにした。

0800 レストランではいつものスコティッシュブレックファストをいただく。



毎回同じような朝食であるにも関わらず、全く飽きることはない。そもそも食事に飽きることなどあるのだろうか。「毎回同じものでは飽きる。」などという言葉が聞かれることがあるが、それはいったいどういうことなのだろうか。栄養が偏らないようにすることは大切だが、その点が解決されているならば、毎回同じであっても特に問題はないのではないか。この朝食について分析してみても、動物性蛋白質、植物性蛋白質の他、脂質、糖質も十分取れている。食物繊維についても全粒粉のパンの他に数点の食材から摂取できる。ビタミン類も焼きトマト、オレンジジュースなどから摂取することができ、特に不都合はない。ミネラル分については血を使ったソーセージもあり、ある程度充足されていると考えられる。なんとといっても血液は非常に栄養価が高く、(通常的人类ではないが。)吸血鬼などそれだけで生きているくらいだ。そのようなことを考えている内に食べ終わってしまった。

飲み物はセルフサービスなので、最後にコーヒーを取りに行く。コーヒーサーバーで保温されていて、最終的には香りのない苦い泥水になるはずのものだ。しかし、レストラン一番乗りなので、まだおいしいタイミングのものをいただけ。ありがたいことである。朝食を無事摂り終え、部屋に戻る。

0840 わずかな荷物を持って、ホテルを出発する。基本的に行動する時にはできるだけ物を持た



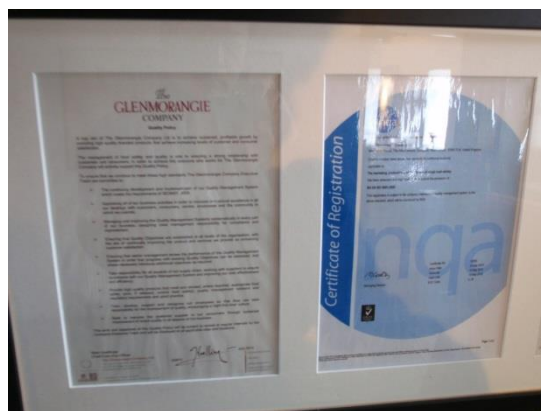
ないようにする。コンパクトに収納できるナップサックには地図、水、ミニタオルくらいしか入れない。サックを失ってもいいように、現金、カードは身につけておく。もちろん、掏られるような大きな財布などではなく、コンパクトなものでポケットからはみ出したり、滑り出したりしないようなものである。観光地には一定数のスリがいることを心にとめておく。これが基本だが、国によって若干変えていく。アメリカではカード主流の国なのに必ず現金を持つと言われた。カツアゲにあった時に渡すものないと最悪撃たれるらしい。中国旅行の時はわざとくしゃくしゃにした紙幣をポケットにそのまま入れていた。郷に入っては郷に従えというわけだ。こういうことも犯罪被害を未然に防ぐ小技の1つであると同時に、その土地の人に溶け込む方法でもあると考えている。0843バスにのる。身軽なのでバス停まですぐだったのだが、なんとバス到着が完璧なタイミングだったのでロスタイムなしで乗れた。本日の目的地まではバスが通っているので、安心だ。アードベック蒸留所までの運賃は2.95GBP。



0916 約30分でアードベック蒸留所に到着。蒸留所の正門辺りに停留所がある。この蒸留所のためのバス停なのだろう。ビジターセンターらしき場所に入り、すぐツアーの申し込みをする。ツアー開始は10時。1時間半のツアーで5drams付き。料金は20GBP。(もう確認の必要もないが、一応確認しておく。Dramとは揮発性半導体メモリ「Dynamic Random Access Memory」のことではなく、スコットランドで、ウイスキーの一杯分を指すものである。何mLといった細かい規定はなく、酒場、時代により、変化する。最近では、25mL、または35mLをワン・ドラムとして提供する酒場が多いらしい。)



ツアー開始まで時間があるので周辺を探索する。すると、意外な発見が。アードベックはアイラモルトらしいスモーキーな味わいなのだが、女性にも人気のあるグレンモーレンジィのキーモルトであるとの説明を発見した。つたない英語力での翻訳なので大きな間違いを含んでいるかもしれないが、そのように解釈できる解説に出会うことができた。この力強いアイラモルトがあのかのグレンモーレンジィの味わいを生み出しているかと思うと、自分ではまだまだ到達できないウイスキーの奥深さを感じた。



1005 ツアー開始。ツアーには、ロシア系だと思われる男性グループがいて、楽しげに参加していた。ツアーガイドが20代前半と思われるかわいい系の女性だったからに違いない。ツアーの邪魔にならない程度の騒ぎ方なので、特に問題はないが、何かにつけてガイドにちょっかいをかけていた。ツアーガイドも慣れているのだろう。それらのちょっかいに対する対応がまさに神対応といった感じで、ツアーの楽しさを全く壊すものではなかった。若いがこれぞプロという姿勢に感心させられた。

ツアーの内容については、ウイスキーづくりの基本は知っているので、95%以上は理解できて

いると思う。ところどころ不明な部分もあったが、全体的には問題なしである。ツアーは1時間ほどで終わり、次はテイスティングである。



天井が低く、まるで秘密基地のようなテイスティングルームで、腰かけながら説明するガイドがカッコよかった。説明を聞いているときは先ほどのロシアグループも真剣な表情で聞いていたが、ウィスキーを味わっているときには指でハートマークなんか作ったりして、ふざけた盛り上がりがあった楽しかった。

1200 ツアー終了。楽しいツアーであった。1杯の量が多かった上に5杯飲んだので、175mL程度のウィスキーを摂取と思われる。このくらいの酒ではどうということはない。気分よくツアーを終え、ショップで何か記念になるものを探していたら、味わいのある簡素なバッグを見つけた。レジに持って行くと、「これは買ったものを入れるためのバッグだから無料であげる。」と言われ、ありがたかった。ウィスキーの1本でも買いたい気分になったが、日本まで割らずに持って行く自信が全くなかったので、申し訳ないが多くの感謝の言葉を述べて、いただいた。

1205 ここアードベックからラガブーリン、ラフロイグと一本道沿いに蒸留所があるのだが、そこには国道に沿うようにして、「3つの蒸留所小道」(Three Distilleries Path)と名付けられた遊歩道がある。バスで行った方が楽だが、時間的にはそれほどかわらないし、何とんでもこの小道を歩かない手はないだろうと思い、あるくことにした。長距離歩行には慣れている。



標識にはラガブーリン蒸留所まで1mとあるが、もちろん1メートルなわけがない、マイルである。1 mile⇔1609.34mだから、1500m程度なら走っても10分くらいだろうが、酒を入れて走ればどうなるかくらいは分かるので止めておいた。そうでなくても昔、あきらめの悪さだけを武器にマラソンや自転車の耐久レースに出たせいで膝を歩行不能になる直前まで破壊してしまった。過去の栄光に頼るのは愚かだ。おとなしくだらだら歩いていくことにした。

夏なのだが、厚い雲に覆われた空、そしてその間から漏れる強い光、UKの絵画によく描かれるような風景がそこにはあった。そして、数々の花々が咲く。UKを構成する地域の花は、イングランドがバラ、ウェールズがスイセン、アイルランドがクローバー、そしてスコットランドの花は「アザミ」である。だから、スコッチウィスキーの瓶にはアザミがデザインされているものがある。理科教師の習性からか、動植物の観察、地形の観察と考察、小道に転がる岩石の同定などをしつつのんびりと散歩を楽しんだ。日本なら残暑が厳しい時期だが、全く暑くないどころか、時々寒い。冷たい雨が降ることもある。雨はすぐ止み、海沿いなのでそれほど湿気も多くないので快適

である。老後に移住するなら、台湾の高雄、フランスのニース、スコットランドのアイラだろうと考えている。



1224 それでも 20 分くらいでラガブルーリン蒸留所に到着。ラガブルーリンはブレンデッドウィスキーのキーモルトとしてもシングルモルトとしてもおいしいと思うのだが、到着したときはほとんど観光客がいなかった。受付にも人がおらず、声をかけると奥から人が出てきたので、聞いてみると今日はツアーをやっていないとのこと。以前も来たことがあるのだが、まるで美術館のような落ち着いた雰囲気施設の施設内だ。入り口から奥に入って左側にラウンジがあり、暖炉やソファがある。絵画や書籍もあり、落ち着ける空間だ。こういうところに来るとつくづく日本の室内は明るすぎると思う。適度な暗さが落ち着くというのが理解できないのだろうか。絵画を眺めていると、先ほど対応してくれた係員が、「どうぞ。」といった感じで1杯渡してくれた。こういうのが何か粋なんだなあ。ラガブルーリン、スコットランド、ここの係員のそういったものの懐の深さというか、真の意味のおもてなしの心というものを感じてしまった。金もらって対価としての「おもてなし」じゃないんだよと、期待されているからもてなすんじゃないよと、もてなしますなんて大きな声言うもんじゃないんだよと、そんな宣伝されまくっている日本のおもてなしの野暮ったさが身に染

みた。そりゃ、日本でも本来のおもてなしはまだ生き残っているだろうけど、宣伝されまくって、それを前面に出しまくってすっかり価値が無くなった感じがある。それで何か特別なことをされないと文句を言う風潮が情けない。もてなされる側にも品格が必要なのだよとお知らせするのも大切なのではないか、その国の文化へのリスペクト云々ではなく、その人の品格が、その人の佇まいが重要なのだよと伝えるにはどうすればよいのだろうか。ま、そんなことをしなければならぬような野暮な奴とは今後も付き合うつもりはないので、関係ないのだが。



ソファに座り、ラガブルーリンを味わう。これは16年だたと勝手に思いながら、かなり真剣に1杯と向き合った。

1313 記念品を 2.99GBP で購入し、ラガブルーリンを後にする。ラガブルーリンからラフロイグまでは少し時間がかかった。距離があるだけではなく、6杯のウィスキーでやや酔いが回ったのかもしれない。

1332 それでも 20 分くらいでラフロイグ蒸留所に到着した。「ただいま。」という感じでラフロイグ蒸留所の門を入った。ラフロイグ蒸留所に土地を所有しているので、「ただいま」なのである。そんな思いを胸に、ビジターセンターの扉を押し

(旅はつづく。)

# 『INCHの楽しい仲間たち』 vol.9 その11

報告「IUFRO（国際森林研究機関連合）DIV.5の国際会議に参加して（第2回）  
長濱和代（林業経済研究所）」

2023年6月4日から9日まで、オーストラリアのケアンズにてIUFRO（国際森林研究機関連合）Div.5（林産物や木材の持続的利用部門）により開催された国際会議とエクスカージョン（遠足）に参加した。今回は国際会議の報告の後半として、世界最古の熱帯雨林と言われるキュランダへのツアーとクイーンズランド州立ウォークミン研究所を訪問した時のエクスカージョンとともに、前回と同様に時間軸に沿って、筆者の行動と考察も交えて、報告をさせていただく。

## 【6月7日】会議4日目

朝はまた鳥の声で目覚める。海が近いので、海洋に生息する海鳥であろうか。日本やインドでも聞いたことのない鳴き声である。乾季に入っていたが今朝も雨が降り、太陽も見え隠れしていた。降雨量が多く、雨と晴れが同時に出現する天候により、熱帯雨林がよく育つのだろうと考えながら、トイレに移動すると、窓から虹がかかっているのが見えた。日本では夕立ち後に虹が見えことがあるが、ケアンズでは朝から虹だ！前日のセッションで自分の発表が終わったばかりだったので、ステキなギフトをいただいた気分になり、嬉しく思った。

宿泊していたドミトリー<sup>注1</sup>は、木造の戸建てで、床も壁の木材のフローリングが敷き詰められていて、窓枠も木でできている。木造の家は癒しの力が感じられよく眠れるのだが、隣室の音やドアの開閉音が聞こえるので、隣人に気遣いをして生活する必要がある。5日間滞在していたので、食事（自炊が基本）や共同浴室へ移動する際などに、隣人に挨拶をして話が済み、隣人との距離が少しずつ縮まっていくことが実感できた。

この日も、朝から国際会議のプログラムに参加する。メイン会場と2つのサブ会場があるので、メインセッション後に3つの分科会がテーマ別で議論が展開されていた<sup>注2</sup>。私はメイン会場に残り、テーマは「大型木材と構造用木材」で自分の専門とはやや外れるが、発表者のプレゼンを興味深く聴いた。とりわけ初日にUSDA（米国農務省）に所属するネパール人研究者のPrakash Nepal博士と話をしていたので、どんな発表をするのだろうかに関心があった。南アジア出身のPrakash博士は、大学卒業後に渡米して、大学院で博士取得後に米国に留まりUSDAに就職をしたとのことで、経済社会的な知見から研究を蓄積しているそうである。セッションでの口頭発表では、米国の住宅と非住宅建設活動について、多くの木材を利用することにより想定される二酸化炭素排出量から、社会的な利点を予測する内容で、私も利用してきたSTATAなどの統計ソフトを使用して分析を行っていた。私は彼の出身地である南アジア地域についての研究に期待を寄せていたが、米国の国益になる知見からの研究が所望されるのであろうと考えた。さらに母国を離れて米国での生活が長く、米国農務省の森林局で研究を続けることで米国人としての考え方が身につくのかもしれない。Prakash博士は、学会開催中、常にネクタイを締めてスーツを着こなし、聴衆に語りかけるような見事なプレゼンを披露していた。本人からの希望があり、プレゼンの時の写真を撮影してお送りした（写真1）。

ランチタイムは、前回にも書いたようにブッフスタイルで、研究者の交流を深めることができる。いつも固定されているグループは少数なので、周囲の様子を伺いつつ、近くの研究者に積極的に話をするため、プレートを持って他のテーブルを回ってみる。何日か繰り返すと次第に顔見知りが増え、会って話す機会が楽しみになる。最終日は「やあ、元気？」と挨拶できる人たちばかりになったらよいが、数百人もいるとなかなか難しい。それでも中国人やインド人の研究者グループと知り合いになり、名刺交換をして、そのうちの何人かは現在もSNSやメールでつながっている。その数か月後、調査でインドを訪問した折には、研究機関を訪問して「IUFROで知り合った研究者の長濱」と紹介され、組織の研究仲間と交流して、自宅に呼ばれて食事会を開いていただく関係に発展していった。今後の国際規模での研究につなげられ



写真1 USDAに所属するPrakash博士の口頭発表（筆者撮影）

たらと思う。

ランチ後の午後のプログラムでは、メイン会場に参加者全員が集まり、エレベーターピッチ・セッションが企画された。「エレベーターピッチ」とは、エレベーターに乗っている位の短い時間でアピールをするプレゼン手法である。このセッションでは、1人5分間で自分の研究や実践を披露する。パワーポイントを使っただけのプレゼンがほとんどであり、14名が参加した。日本からは木材利用研究会の事務局をされている長坂健司さん（東京大学）が、環境活動に関する情報開示と木材産業の企業価値について、緻密に書かれた複数のスライドを使って短時間で効果的にプレゼンをされた。セッションごとの発表とは異なり、ホールで100人以上の聴衆に自分の研究を披露できる利点があるが、会場での個別の質疑応答が難しいため、ランチやお茶の時間にプレゼンターを見つけて話しかけるのが良いと思われた。中国人研究者からは、プラスチックの代替品として竹の可能性についての研究発表が複数あり、その後の交流会では竹でできたストローや紙をいただき、「竹をパルプにすれば様々な製品が作れるよ！」との情熱的な解説をいただいた（写真2）。中国では、世界に先駆けてプラスチック製品が竹製に変わっていくのかもしれない。



写真2 中国人研究者らが開発した竹ストロー（筆者撮影）

午後のセッションを経て、19時からメイン会場で最大の夕食会であるカンファレンス・ディナーが開催された（写真3）。各テーブルに着席して、主催者の挨拶と貢献団体の表彰、そしてアポリジニの歌と演奏に始まり、音楽グループのライブ演奏、食事会の後は研究者たちが舞台上がってダンスタイムが始まった。多くの研究者が舞台上上がり、酔いも忘れるほどに歌って踊り、熱く盛り上がり、森林にかかわる研究者たちの勢いが実感できた。



写真3 海外の女性研究者たちとテーブルを囲む（USDAの研究者撮影）

終了後は、「夜も遅く一人でホテルに戻るのは危険だから」と、知り合いになったインド人研究者が私のゲストハウスまで送ってくれた。宿につくと、彼はホテルを見上げ、「自分はもっと安いホテルに泊まっている。それでも今回の学会でかかった費用は、給料一か月分以上で、教授レベルは出張旅費を国がサポートしている。先進国はすべての価格が高いね。」とつぶやいて、自分の宿へ帰っていった。国家間だけでなく、研究者間の経済的格差を実感した。

## 【6月8日】5日目 個別のエクスカージョン

ケアンズといえば「キュランダ鉄道」という列車が有名である。キュランダという街へ行くための観光列車でもあり、一度は乗車できればと思っていた。翌日の学会全体のエクスカージョンでもキュランダを訪問するのであるが、その手段は「スカイレイル」というモノレールとのことで、「ここで乗るしかない！」と考え、前日にケアンズ駅のインフォメーションセンターでチケットを購入した。繁忙期でないため、前日でも普通クラスの窓際席が往復72ドル（約7100円）で購入できた。ゴールドクラスでは、49ドルを追加して、アルコール等のドリンクと軽食のサービスを受けられるとのことで魅力的だったが、車窓からの風景をしっかりとこの目で見て心に留め、片道



写真4 キュランダ鉄道の列車から臨むジャンガラループ（筆者撮影）

約2時間の鉄道旅を満喫したいと思い、普通席にした。もし、読者の皆さんが鉄道好きでアルコールにも強いのであれば、ゴールドクラスをすすめたい。

朝8時半にケアンズ・セントラル駅を出発、途中、フレッシュウォーター駅を通過して、15分くらいすると、90度以上はカーブしていると思われる見所「ジャンガラループ」を通過する。車内アナウンスも入り、列車のスピードもやや遅くなり、写真撮影ができる（写真4）。乗っている

列車が見えるカーブは珍しく、「世界の車窓から」(テレビ朝日)でも放映された場所である。次に現れるのが、いくつかの滝である。最初にストーニークリークと呼ばれる滝の横の横を列車で通過した後、次にバロンフォールズと呼ばれる滝が遠方に、手前にはスカイレイル(モノレール)が見えた。ここでは滝の名前が付いたバロンフォールズ駅があり、10分間の下車ができるため、遠くまで広がる熱帯雨林と滝を十分に堪能できる(写真5)。

10時半に目的地のキュランダ駅に到着。駅を出て、バロン川方面へ向かうと、「ボートツアーあり」との看板を見つけた。次のツアーは10時45分からとのことで、45分間のツアーで大人18ドル。幸いにも空き席があったので、飛び込みで参加させていただいた。ツアー<sup>注3</sup>では、野鳥だけでなく、カメや野生のワニが泳いでよる様子も観察できる。また熱帯雨林を開いて、コーヒーの木を植林した地元住民の林地(庭)が見え、観光客を喜ばせるために、野鳥を飼育している場所にも案内いただくなど、自然と観光の両立を目指そうと地域で取り組んでいる様子が観察できた。

その後、キュランダの街を歩き、キュランダ産のコーヒーを飲んだあとは、インフォメーションセンターへ。60歳を優に超えたと思われた女性らが華やかなブラウスを着て、丁寧に案内をしてくれた。世界最古である熱帯雨林ハイキングコースがあるそうで、案内に従い、残りの1時間くらいを森の散策をすることにした。天然林で覆われた林内は水辺もあり快適な空間で、コースの最後はボートツアーをしたバロン川へと続いている。何千年も生きた巨木に出会えるかと期待していたが、見つけることができず、何百年に数回は伐採されてきたのかもしれない。

キュランダ駅からの帰路、列車内の隣席で日本人の女性に出会った。キュランダで初めて見つけた日本人で、オーストラリア人の女性とペアで電車に乗りこんできた。バロンフォールズは、今は乾季で雨量が少ないが、雨季の時期は水量が増えるため、季節により表情が異なり面白いから、時期を変えてまた来てはどうかと勧められた。二人とも夫が医者で、夫の学会に同行してきたそうで、夫と共に海外を巡ることができ楽しそうに見えたが、さらに話すと、日本人女性は元看護師で、子どもがほしくて仕事をやめて専業主婦となり、現在は親の介護で忙しくしているとのことであった。男性は仕事で女性は夫の後方支援というカップルは少なくないが、社会通念に縛られ自らの希望で選択していないとすれば、社会は男女平等ではないと思われた。もう一人の現地の女性は、看護婦の仕事を続けながら何人も子どもを育ててきたそうで、人生の至福の時間は、夜に一日を振り返り仕事を通じて人生に満足感を見出す時間だと語った。人生について満たされているか(充足感)、私たちは至福を味わえているのか(幸福感)。列車の中で、生きることの意味について話し合う機会をいただいた。

午後3時頃にケアンズ・セントラル駅に帰着した。学会では午後1時にクロージングセッションがあり、この日は各セッションに分かれて、発表者同士でテーマの振り返りと交流を深めたとのことであった。自分は、熱帯雨林への列車旅を企画したので、参加が難しくなったが、知り合った研究者とは、今後もネットワークを深めていきたいと考えている。IUFROで得たネットワークによるその後の交流については、また別の機会に書かせていただきたい。



写真5 バロンフォールズ駅から望む熱帯雨林と滝(筆者撮影)



写真6 スカイレイル(モノレールから)の熱帯雨林の眺め(筆者撮影)

### 【6月9日】6日目(最終日)全体でのエクスカッション

朝、ヒルトンホテルに集合して、バスに乗りこみ、午前中はスカイレイルを使って再びキュランダを訪問した。前日に続いての熱帯雨林へは、陸路ではなくモノレールを使って空からのアクセスである(写真6)。価格も上がり、昼食代やバス代も込みの日帰りツアーに250ドルをIUFRO事務局へ支払いをした。高額ではあるが、空から森を眺めることができるのは、スカイレイルの利点である。

キュランダの老舗ホテルでランチを食べた後、数十年前の写真が展示されていて、じっくりと見る時間があった。その写真

に写っている立木は、直径が人の身長近くもあり、切り出されていく様子がわかり、この周辺の原生林は伐採されていることが推察された。

午後は州立ウォークミン研究所<sup>注4</sup>と林地や農作地等の関連フィールドを訪問した。研究所へ入る際には、外部からの細菌・ウイルスなどの除去と消毒を兼ねて、私たちの履き物だけでなく、バスのタイヤまで消毒液に浸されてからでないとい入所できなかった。研究所では幅広く科学研究開発(R&D)を推進していて、クイーンズランド州の熱帯園芸と作付環境の改善のために、灌漑設備や熱帯農業システムを取り入れていた(写真7)。

研究所訪問のあと、最後のティタイムがあり、若手の現地の大学助手がスーパーで買って来たばかりのおやつや飲み物を参加者で分け合い、ふり返りをした。私たちは、アジア・オセアニア地域だけでなく、欧米やアフリカからなど国籍の異なる研究者集団であったが、毎日、顔を合わせてきたので、皆ファミリーの一員のような気持ちになった。道中、オージーの英語は難しいと感じる場面もあったが、最後は手を振って、感謝の気持ちで別れができたのがよかった。



写真7 州立ウォークミン研究所の植林地を訪問(筆者撮影)

今回のIUFRO参加後に、同じセッションで知り合ったインドのFRI (Forest Research Institute) の研究者とやり取りが続き、2023年8月のインド訪問ではFRIを訪問して再会することができた。研究所内の図書館や大学を案内いただき、組織を通じての共同研究の可能性について話し合った。海外共同研究のファンドがとることができたら、ぜひ実行に移したい。

学会を通じて知り合った北欧の研究者からは、2024年6月にストックホルムでIUFROの全てのDivisionが集う5年に一度の大会があり、申し込みをするように誘われたので、ケアンズで要旨を書いて申し込みを済ませた。先立つ資金の有無と職場で休暇申請ができるかは微妙であるが、昨年末に要旨がアクセプトされている。

こうした機会をいただいた林業経済研究所の土屋所長はじめ研究所の皆さまに感謝申し上げます。研究発表については、科研費(21K12398)により渡航費の支援を得た。その他、ご支援をいただいている関係者の皆さまにもお礼を申し上げます。

#### 【文末脚注】

注1. Travellers Paradise Heritage Historical Guest House

住所: 187 Bunda Street, Parramatta Park, Cairns Central, 4870 ケアンズ, オーストラリア

注2. IUFRO2023@Cairnsの各セッションのプログラムはこちら(英語)

[https://www.iufro-div5-2023.com/\\_files/ugd/39a717\\_8bd4535d5dad4d75bea6bfe20f6c68d3.pdf](https://www.iufro-div5-2023.com/_files/ugd/39a717_8bd4535d5dad4d75bea6bfe20f6c68d3.pdf)

注3. キュランダ・リバーボート・ツアー(英語) <https://kurandariverboat.com.au/>

注4. クイーンズランド州立ウォークミン研究所のウェブサイトはこちら(英語)

<https://www.daf.qld.gov.au/contact/stations-facilities/walkamin>  
<https://www.sciencedirect.com/science/article/pii/S0264127523002277>

# 『第20回 NPO法人 自然文化誌研究会 通常総会』のご案内

2004年に東京都の認証を受けてから、第20回目の総会を行います。昨年に引き続き、オンラインでの開催としました。正会員の皆様はぜひご出席ください。また出欠を同封のハガキでお知らせ下さい。このハガキは欠席の場合は委任状となっております。ご意見などお気軽にお寄せください。なお、正会員以外の会員の皆様もオブザーバー参加が可能です。

日時：2024年2月10日(土) 11:00 開始～12:00 終了予定

場所：ZOOMでのオンライン会議

議題：①2023年活動報告 ②2023年収支報告 ③2024年活動計画 ④2024年収支予算 ⑤その他

**\*出席される方にはzoom会議のURLをお知らせしますので、1月中に事務局までご連絡ください。**

## ご報告

(民宿中津屋の山中進さんが昨年末に亡くなりました、本会運営委員の立川信史さんからご報告をいただきました)  
進ちゃんに会いに行ってきましたので、ご報告させていただきます。

姪御さんのお宅にお骨と写真を置いてくださっていて、お電話した際、お線香あげたいと伝えたとこ、大変快く承知してくださいました。中に通してもらって、すぐに進ちゃんの遺影とご対面しました。

進ちゃんは癌を患って、一度回復した後、また悪くなってきてからはこのお家で過ごしていたようです。

本人は全く死ぬ気がなかったようで、おせちを買ったり、年末ジャンボ買ったりしていたみたいです。

24日には、友達が遊びに来ていて、ギターを弾いてもらったりしていたようです。

25日に容体が悪くなった時も、自分で救急車を呼んで、隊員にいつもの医者とのやりとりなどを説明していたそうですが、病院に着く頃にはもうかなり悪くて、すぐに亡くなってしまったということでした。

まさにピンコロの代表というか、忙しい進ちゃんらしい逝き方だったのかなと思います。

姪の方と、もう一人親戚の方がいらして、昔話など、進ちゃんの思い出話でしばらく談笑させてもらいました。

親戚よりも、友人との関わりが多かったことで、できるだけ多くの友人に葬儀などでお別れさせてもらいたかったけど、急だったことと、年末だったこと、進ちゃんが生きる気満々で、自分が死んだ後の事を親戚に伝えていなかった事などから、連絡できなくて申し訳ないと言われました。

皆さんには、可能な範囲で会いに来てくれれば本人も喜ぶだろうと言ってくれました。

進ちゃんの事ですから、ミッチーに逢いたくて逢いたくてたまらなかったのだと思います。

遺影に手を合わせている時に、おい、タチ！お前はみんなに面倒見てもらって今があるんだから、感謝して生きろよ！

って声が聞こえて来ました。

(進さんに会いに行きたい方は事務局までご連絡ください)

## ○ 自然文化誌研究会 一緒に活動しませんか？

略称INCH(インチ)。冒険・伝承・創造をキーワードに『国際的な視野で人間をとりまく自然と文化を野外において探求する野外環境教育のパイオニア』として、40年以上にわたって活動を続けています。2004年からNPOとして再出発し、活動の中心を山梨県小菅村に移し、子どもを対象とした『冒険学校』や市民を対象とした『のびと講座』『ELF環境学習中堅指導者養成講座(のびと研修会)』などの山村の自然や文化を学ぶ活動を通じて、持続可能な社会を形成していく上で必須である環境学習の実践と農山村の振興を実現させるため、エココミュニティづくりを行っています。本会の運営は会員の皆様のご協力と、会費で成り立っています。ぜひとも会員の輪を広げていき、納入をお願い致します。本会の趣旨に賛同いただける方なら、どなたでも会員になれます。なお、正会員のみが総会における議決権を持ちます。それ以外の会員は、総会にオブザーバー参加となります。会費は

年額(1~12月)です。また、皆様からのご寄付も募っております。

正会員：10,000円 一般会員：5,000円 学生会員：3,000円

賛助会員(個人・団体)：10,000円 家族会員：6,000円

植物と人々の博物館友の会会員：3,000円

雑穀街道特別会員：1口1,000円から

・成合基金(冒険探検基金)：「成合基金」とご記載してください。

・寄付：「寄付」とご記載してください。

①郵便振替口座：00100-2-665768

口座名：特定非営利活動法人自然文化誌研究会

②ゆうちょ銀行：店名00八 普通口座

口座番号 9479450

口座名：特定非営利活動法人自然文化誌研究会



ナマス 152号

特定非営利活動法人 自然文化誌研究会 会報誌  
<発行日>2024年1月20日  
<編集>自然文化誌研究会 事務局  
<発行> 特定非営利活動法人

## 自然文化誌研究会

The Institute of Natural and Cultural History

<事務局>〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村3337-2

TEL：090-3334-5328(事務局 黒澤)

E-mail：npo\_inch@yahoo.co.jp ←!変更しています!!

H P：http://www.npo-inch.ppmusee.org/index.html